

1984年春の遺伝情報研究センター発足から3年近く経った86年12月、日本DNAデータバンク（DDBJ）でようやく本格的なDNAデータ入力が始まった。そして87年7月、「DDBJリリース1.0」が公開された。今からちょうど30年前、DDBJが踏み出した第一歩である。

「1.0」は、現行リリースのデータ量の実に2千万分の1という規模だった。すでに軌道に乗っていた米欧との差がなかなか縮まらず、国内外からの圧力

## 丸山センター長が急死



は高まりつつあった。DDBJはさらに大きな痛手を負う。センター長の丸山毅夫が87年12月に心不全で急逝した。51歳だった。そのころの丸山は多忙を極

め、死後には未開封の手紙の束が見つかったという。丸山は、自らの研究室と併任する形でセンター長を務めていた。丸山研究室の助手だった五條堀孝は当

時、丸山が次第にDDBJの仕事に追われて研究の時間が取れなくなる姿を見ていた。

研究の面では、五條堀は所内の集団遺伝研究部門のメンバーと

交流を深めていた。部門長の木村資生は頻繁に五條堀の居室を

訪れ、やがて週の半分は五條堀が木村を自宅まで車で送るようになったとい

う。木村を送り届けた後、五條堀は夜の研究所に戻り、丸山からDDBJの運営について相談を受ける

こともあった。

丸山が突然他界し、五條堀は葬儀の準備や研究室の片付けに奔走した。丸山を失い、もう自分は研究所から出て行かざるを得ないと思つたという。しかし「どういうわけか」助教授に昇任することになった。集団遺伝グループが応援してくれたのかもしれないと、五條堀は控えめに語る。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）

1987年の遺伝情報研究センターのメンバー。

前列左から3人目が丸山毅夫

丸山毅夫

丸山毅夫